

「この人に聞く」成熟社会と建築

茶道・武者小路千家 官休庵第14代家元

千 宗守



日本の伝統文化を牽引する役割を担う、茶道家元の千氏に、伝統文化の継承についての考え方と次の世代に対する思いについて聞いた。

■茶の湯という言い方と茶道という言い方がありますが違いはあるのでしょうか。

「茶の湯」という言葉は歴史的にすごく古いんです。みなさんが言われる「茶道」は、江戸も末期になってから出来た言葉で、正しくは「ちゃどう」と言います。

江戸時代、社会が成熟してくると戦争がなくなり、武士は本来の「戦う」という特性を失っていきます。元々、「士農工商」の身分制度の中で、経済という実質的な力を持つ商人を、圧倒的な武力で治めるという社会構造でしたが、それは士族が命を張って戦争するからこそ、崇められ、パワーを持ったわけですが、それがなくなってくると、今で言う官僚化していくわけです。そうすると当然そこには年貢を取り、それを金銭に換えて、政治基盤をつくったりしていく商人と変わらない行動をとるようになる。

しかし、それではいかんと。凛々しさがあってこそ士族ですから、武士は武士たる規範をつくらうと考えたわけです。

当時、江戸の中頃から、儒教が入ってきて、これは身分関係とか長幼の序にうるさい思想です。これを幕府の御用学者たちがうまく日本流にアレンジして創り上げたのが、あらゆる芸道に道をつけるということで、「剣術」なら「剣道」、「立花」を「華道」。我々の「茶の湯」も当然そういう作法を教える、作法を収斂するためのものでありましたから、「茶道」と言おうと。

茶の湯も士族たちの教養の一つとして流布していて、我々の先祖も大名仕官をして、扶持米で生計を立ててましたから。侍たちがそういうことをやりだすと、それに合うような茶の湯にしていかななくてはならない。それで、礼儀作法を茶の湯に取り入れるようになったんです。

それが「茶道」なんです。もうがんじがらめに縛りつけてしまう。縛られてから「茶道」になったわけですね。

しかし、私は歴史的なことを語る人が多いので、歴史的に長い期間使われている言葉である「茶の湯」を使います。

■何をもって「茶の湯」と言うのでしょうか。

茶の湯というのは、本当に楽しもうと思うと手間暇かかります。なにか作品を仕上げたので完了というものではありませんから。そういう意味で、具体的に何かと問われると難しい。正座の仕方か、お茶のきれいな飲み方か。そうではない。皆、口から飲むわけですから。茶の湯というのは、普段にしている日常動作の延長です。飲むという行為の一つのパターンですね。生活の一部です。それを果たして何がメインなのかというのは難しいです。

そして、使う道具類もかなり多い。そして道具の他に、茶室、庭、お茶菓子など、いろんな分野が必要になってきます。だから元々茶の湯というのは、普遍性ということ問われると非常に弱いんです。

ですから、茶の湯はアプローチの仕方がものすごく多岐にわたってます。例えば、焼き物が好きだから入ってくる人、お茶菓子や料理から入ってくる人がいます。茶室や焼き物から入ってくる人が一番多いです。そして、庭園からも入ってきますね。着物が好きだっていう人もいます。

■「茶の湯」の持つ伝統と成り立ちについてお聞かせ下さい。

元々中国から入ってきましたから、茶の湯は本来、椅子・テーブルを使う立礼（りゅうれい）だったんです。それが正座になっていったのは、「茶道」になりストイック性が強くなってから、江戸の中期以降ですね。そうすると我々がイメージする伝統の世界は、存外歴史が新しいということです。少なくとも今の茶の湯というのは八百年の歴史があり、その内の後半の二百数十年に出来上がったものが我々のイメージとして「伝統」と言われてるわけです。

それから今では、楽茶碗、竹のお茶杓、花入れなど、利休が作ったものが非常に珍重されて、伝統中の伝統やって言われてますけど、当時あの楽茶碗なんてとんでもないもので、実にアバンギャルドであったわけです。当時で言えば、「唐物（からもの）」と言って、中国から入ってきた、シンメトリックで、単調な感じの、整数で割り切れるような美しさが主流であって、それに堅焼きですから、焼物にしても非常に半永久的なんです。

ところが利休はですね。瓦職人に実にグロテスクなしかも火度も低い、つまり脆いんです。色も黒い、歪んだような、ひょうげた形で。それから茶杓も裏の竹やぶに行ってきてパーンと切ってきて、削って使った。利休は非常にアバンギャルダークだったんです。それがいつの間にか古典化していくわけですね。もう楽茶碗なんて現代の茶の湯の世界では今や古典中の古典やないですか。

だから伝統というのは、革新と言うかな。その当時の最先端なものが、後世の批判に耐えて残ったものが「伝統」になるわけですね。

■次の世代への継承についてお考えをお聞かせ下さい。

少なくともこの千家の茶の湯は四百数十年の上に立ってます。それ自体が伝統なわけですね。しかし、今日私がすることは、どんなものであれ、現代的であることに違いはない。それが時間の経過と共に、後々に残るかどうかですよ。そして残ったものが伝統になっていくわけですね。だから、私は特に今自分がやっていることが「伝統をやっている」と意識もしません。ただ色々やらなくてはならないことがある。それを淡々とこなしてるといのが正直なところですね。伝統を守ると言っても肩肘張って残せるもんでもない。

茶の湯の世界でなくても、例えば事業であっても、いくら親が万全たる基盤を築いても、そして子に教えても、本人にヤル気がなければ、絶対ダメだということです。ましてやこの伝統的な世界は。

ただ、同じものでは面白くないわけですよ。親子でも違いがあってこそ、代替わりと言いますかね。

でも日本人は、成熟社会って言うだけに、だんだん礼儀正しく、非常に大人しくなってます。でもそれは衰退期に入ってきてるとも言えます。そうならないようにするためには、やはりこれからの担い手たちを少々叩いていじめてでも、苦境に立たす、発奮さすようなことは必要です。ただ単にこちらのやっていることを見とれよではいけない。しかし今は配慮ばかりで次の世代に抵抗力を付けさせるなんて考えてない。

つまり「育てる」というのは、何もジェントルに育てるという意味ではないんです。ただこちらは文化の世界ですから、叩いてばかりとはいきませんから、あとは何も言わない。放っておくということです。特にプロフェッショナルな世界では教えない。もちろんチャンスは与えているわけです。ただそのチャンスに気付くかどうかは本人の度量ですよ。またそういう感性を備えた人間でないと、こういう芸事の継承はできません。常にこの耳目を本能的に集中させる、そういう敏感さがないといけません。

私は息子を東京に出して好きなことをさせてます。私は父親から、実際に何かを教わるということは全くなかったけど、とにかくガミガミ叱り付けられたんです。そういうことは、私は一切息子には言ってません。それは親から見れば、いろんな至らんとこは目に付きます。以前は、「息子は勝手にやっどる」と、「それはそれでいいことだ」と思って、あえて黙って小言を言う事をしませんでした。多少言うべき時はガミガミ親父のように言わなならん時があったなという気は今はしてます。

ただ、これは息子がいつ気付くか。これまで好きにさせてもらったのは何のためかと、自分はやはり伝統の世界にいるからなんだと。そこに彼が気が付いて、その基盤となるものにそろそろ自分はどういうコントリビュート、寄与ができるかということですね。それに気が付いてきたら、このもう年老いた父親を重労働から多少は解放してくれるんじゃないかと淡い期待をいだいている今日この頃です。